

合同

No. 504

「自分の十字架を背負って」

つるかわ台教会牧師

三浦 寿夫



「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」（マタイによる福音書16章24節）。

このメッセージを受難節の中で読まれていることと思います。今まさにわたしたちの主は、十字架へ向かって歩みを進めておられます。

福音書には、主イエスが御自身の受難について語られ始められたときのことが書かれています。

ペトロが主イエスに対して「あなたはメシア、生ける神の子です」（16章16節）と答えた、その後のやり取りです。

弟子たちに人の子は苦しみを受け死なれること、そして三日目に復活することになっているということをお話されました。マタイは、「打ち明け始められた」と記し、マルコは「はっきりとお話になった」と記しています。いずれにしても、弟子たちは面食らい不安になったことでしょう。イスラエルを建て直してくれるはずのメシアが、苦しみを受けて死ぬことを話され始められたのですから。

ペトロは、イエスさまをいさめ始めました。まさに神の救いの御計画を語っておられる主イエスをいさめ始めたのです。

まだ彼は、救いのこともメシアの苦難の意味も、分かっていませんでした。神の御計画が人間の霊的な救いであり、罪の支配からの贖いであることを理解してはいなかったのです。イエスさまと共にいながら、神の愛の意図を知らなかったのです。

そこで主イエスは、ペトロに「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている」と叱られました。ペトロは、なぜ叱られたのか分からなかったかも知れません。自分は正しいことをしているという思いにあったのではないのでしょうか。

この世の考えからすれば「そんなこと言うてはいけません」という方が当然だと思っているペトロに対して、イエスさまは「サタン」と叱られたのです。

このペトロが本当に打ち砕かれたのは、主イエスの言葉通り、主を三度否認したときでした。（マタイによる福音書26章75節）

イエスさまは、言葉を継いで「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」と言われました。

主イエスの言われた「自分の十字架を背負い」というのは、何かわたしたちが自分の力をふりしぼって重荷を背負っていくということではありません。あの十字架のイエスさまのように、死ぬことを意味しています。

それは、神よりも自分を中心にし、この世の価値観の中での正しさを誇っている、そんな自分として死ぬことを意味しています。

福音に生きることのむずかしさを思います。人間としての小さな誇りを手放すことのむずかしさがあるからです。自分を守ることの向こう側にある、神に自分を委ねた命に飛び込むことがむずかしいからです。

しかし、わたしたちは、この死が罪に対する死であることを知っています。そして神との愛の関係を解き放たれることを知っています。

なによりも神が和解してくださり、わたしを受入れてくださる恵みに感謝したいと思います。まことの命はそこにあるからです。

受難節は、神がわたしたちを、人間が考える自分の命から、永遠なる神がお与えになる愛の命へ移されたことを覚えるときです。十字架は滅びに定められたこの世の生き方を手放すことです。そこに主が開かれた命の道があります。

まもなく、イースターです。主の復活こそ、まことの命にあずかる恵みを祝うときです。ペトロも十字架の死を味わい、主の愛に目が開かれました。「わたしたちが神を愛したのではなく、神がまずわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに神の愛があります」（ヨハネの手紙一4章10節）。

自分の十字架を背負って主についていきましょう。そこにこそ、愛の命がありますから。